

県指定史跡 「府内城跡」西側土塀保存修理 工事の現場見学会資料（改訂版）

大分市教育委員会事務局 文化財課
日時：令和6年5月19日（日）10時～

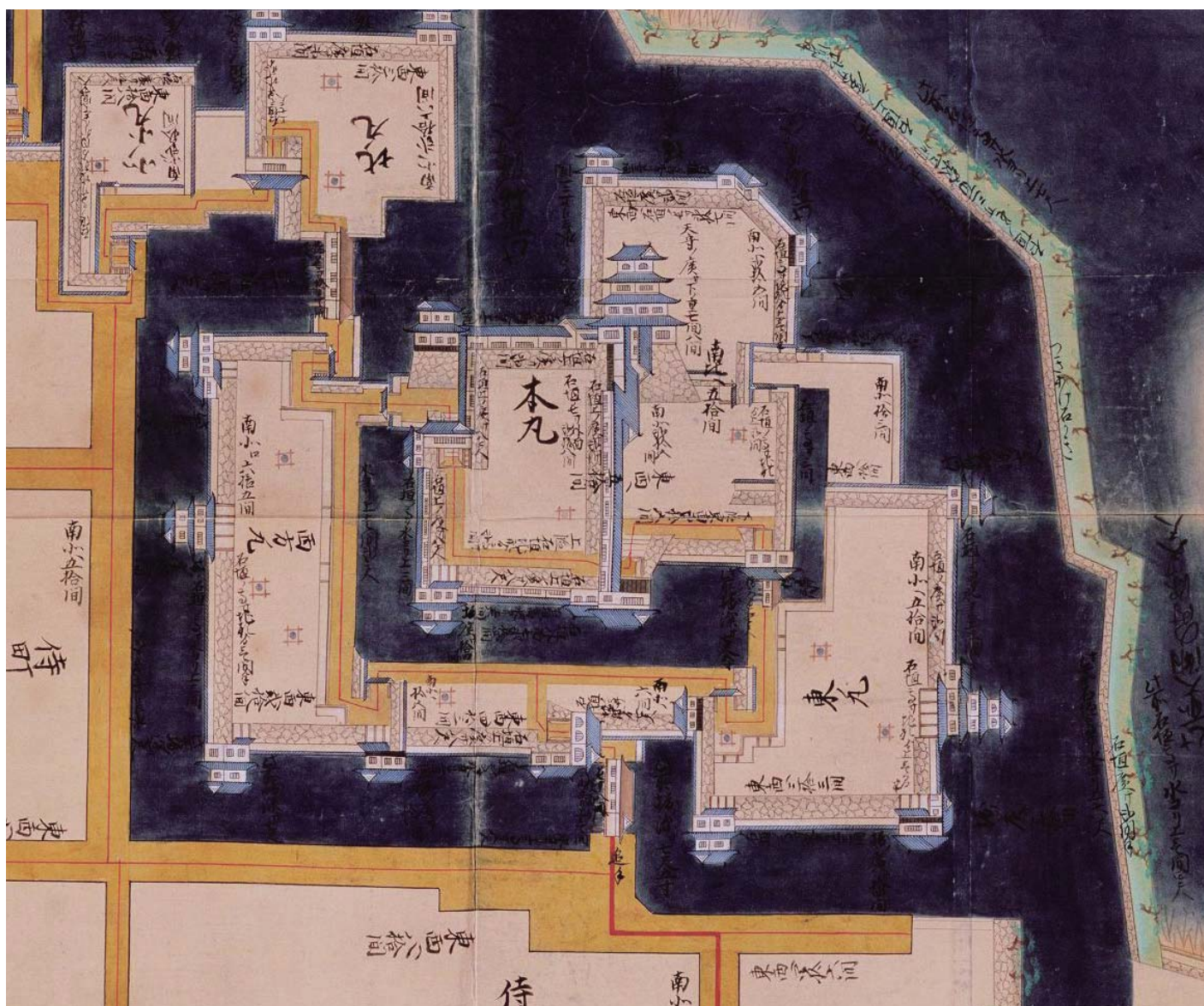
大分市では、令和5年6月30日からの梅雨前線豪雨で壊れた大分城址公園西側土塀の災害復旧事業を進めています。西側土塀は県の文化財に指定された「府内城跡」二之丸土塀の一部です。

普段は見るできない土塀内部の様子や、土塀にまつわる府内城の歴史などを広く市民の皆さんに紹介します。

府内城の概要

1597年（慶長2年）に豊臣秀吉の命により、石田三成の妹婿にあたる福原直高が築城を開始しました。その後、府内城主となった竹中重利が、家康に豊後の「衙府」にふさわしく天守を美しく築き、しっかりと城郭を造るようと命じられ、府内城の増築を行い、天守をはじめ本丸・二之丸・三之丸（武家屋敷）を完成させました。

「大権現（家康）許命重隆（府内藩主竹中重利）曰、其地者は為豊後之衙府。故精可築殿主（天守）、固成城郭。」『豊府聞書』より



第1図 「豊後府内城之絵図」（部分）国立公文書館デジタルアーカイブを使用
～1644年（正保元年）の幕府の命令で、全国の大名が調製した城絵図。当時の様子がよく分かる。

【被災当時の状況】

梅雨前線豪雨で壊れた土塀は、幅約6m、高さ約1.8mの範囲でしたが、この崩落により土塀全体が不安定な状態になりました。

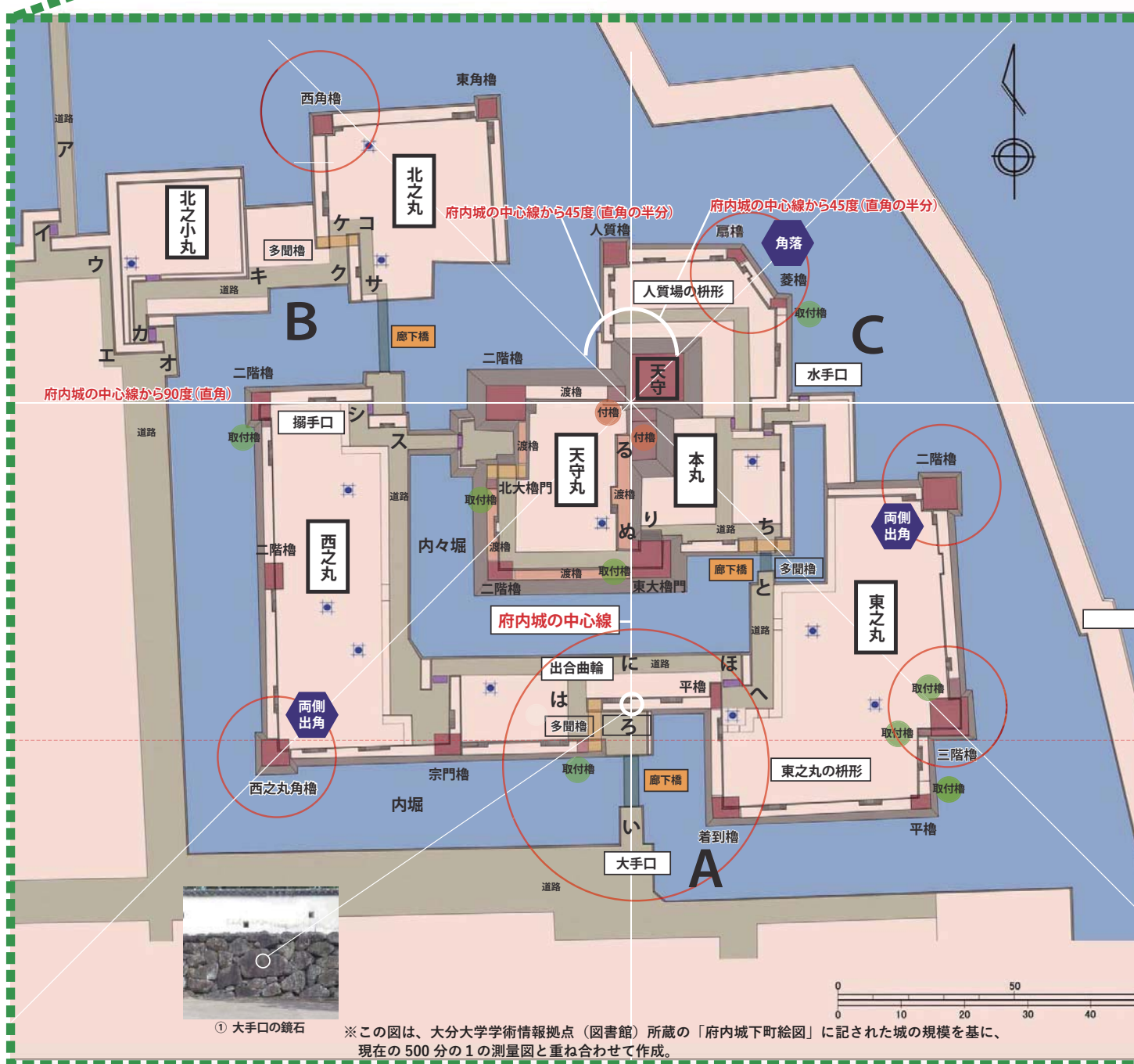


豪雨で倒壊した部分

土塀は傾き、全体にたわみが生じ、一見して壊れていない部分も内部で破壊が進行していました。



内部の破壊が進みたわんだ状況

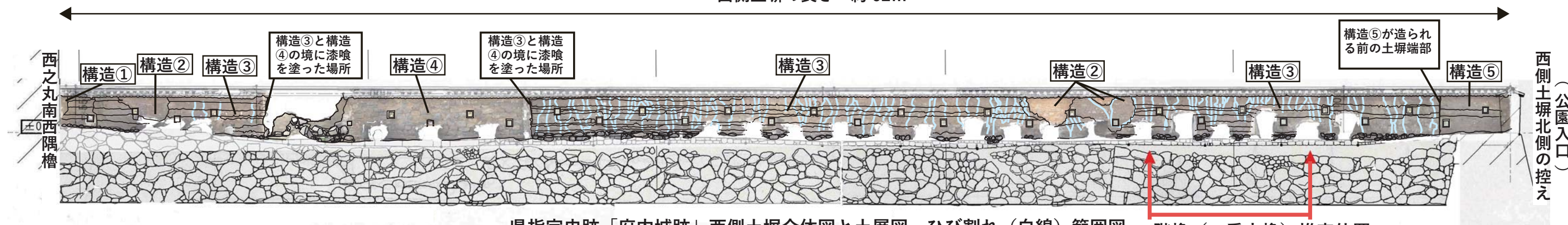


第2図 府内城の縄張り図 ～迷路のように複雑なつくりになっていたことが分かる。

【西側土塀全体図と構造】

2

西側土塀の長さ：約 62m



県指定史跡「府内城跡」西側土塀全体図と土層図・ひび割れ（白線）範囲図 二階櫓（二重中櫓）推定位置



構造①

土の中に瓦を混ぜて造られています。1966 年（昭和 41 年）の府内城整備工事で修理されたものと考えられます。



構造②

土と、規則的に並べた瓦などを交互に積み重ねて造られています。北側の構造②は 1993 年（平成 5 年）に修理をした場所です。



構造③

土と、土塊入り土を交互に積み重ねて造られています。土塀の大半を占める構造で、5 つの構造の中で最も古いものです。



『府内城諸櫓門図帖』 西之丸角櫓
松栄神社所蔵 【大分市指定有形文化財】

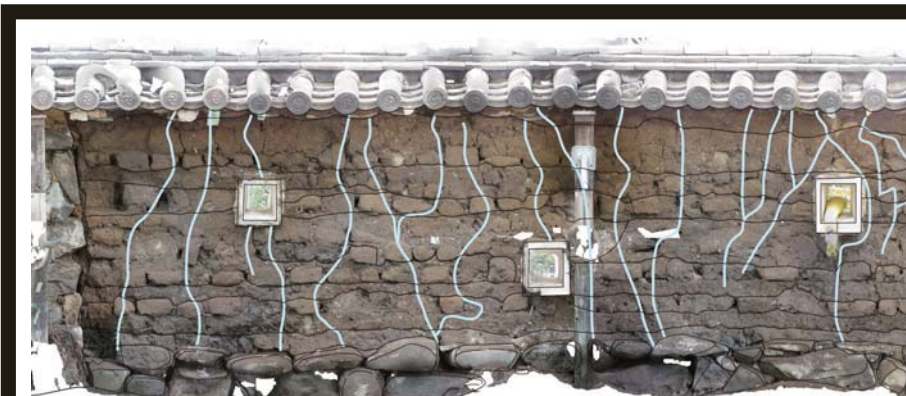
構造④

石を積み上げて造られています。1860 年（安政 7 年）の絵図にある板塀の場所が、1966 年（昭和 41 年）の府内城整備工事で石積み構造の土塀に変わりました。



構造⑤

砂質土を積み重ねて造られています。1921 年（大正 10 年）の旧大分県庁の新築の際に、西側の入口工事に伴って造られたものとみられます。



【土塀に生じたひび割れ】

縦方向のひび割れ（白線部分）が 10 ～ 50 cm ほどの間隔で、西側土塀のほぼ全体に渡って生じています。そのため、早急に修理が必要です。

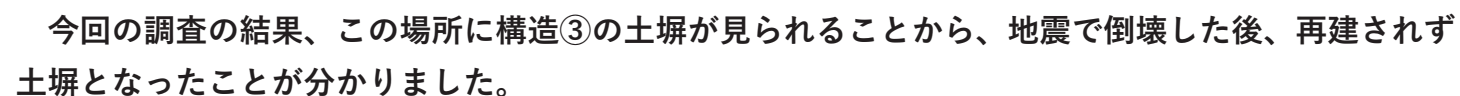
(2) 中櫓の位置に土塀が造られていることを解明しました。



明治から大正の古写真には、この板塀が写っており、この頃まで板塀が残っていたことが分かります。石造りの構造④は、他の土塀と同じようにするため、板塀部分を埋めた際のものと考えられます。



第5図 西之丸西側土塀の位置
構造③



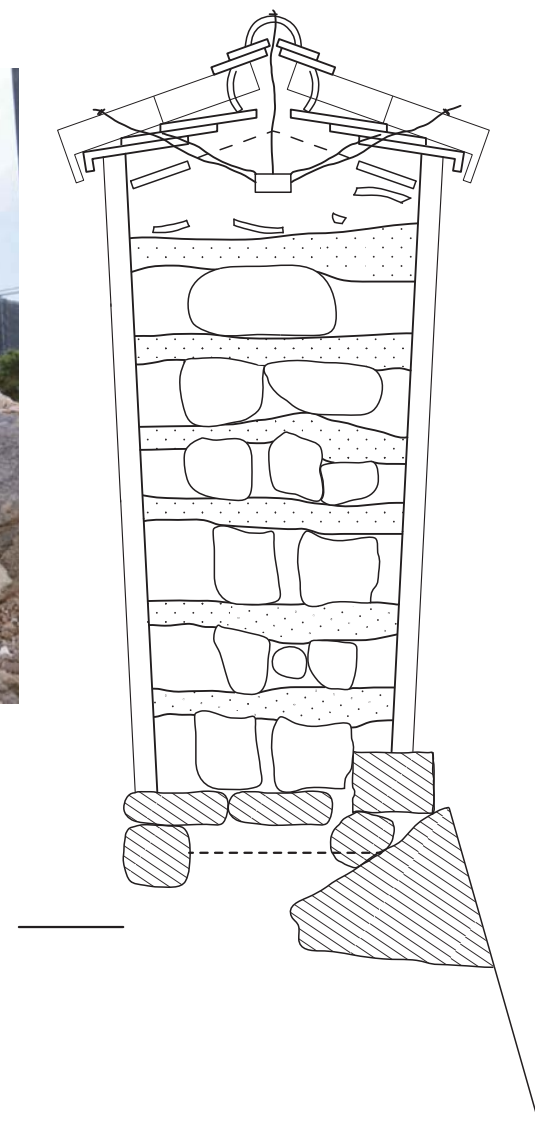
県指定史跡「府内城跡」西側土塀



構造③の写真(北から)

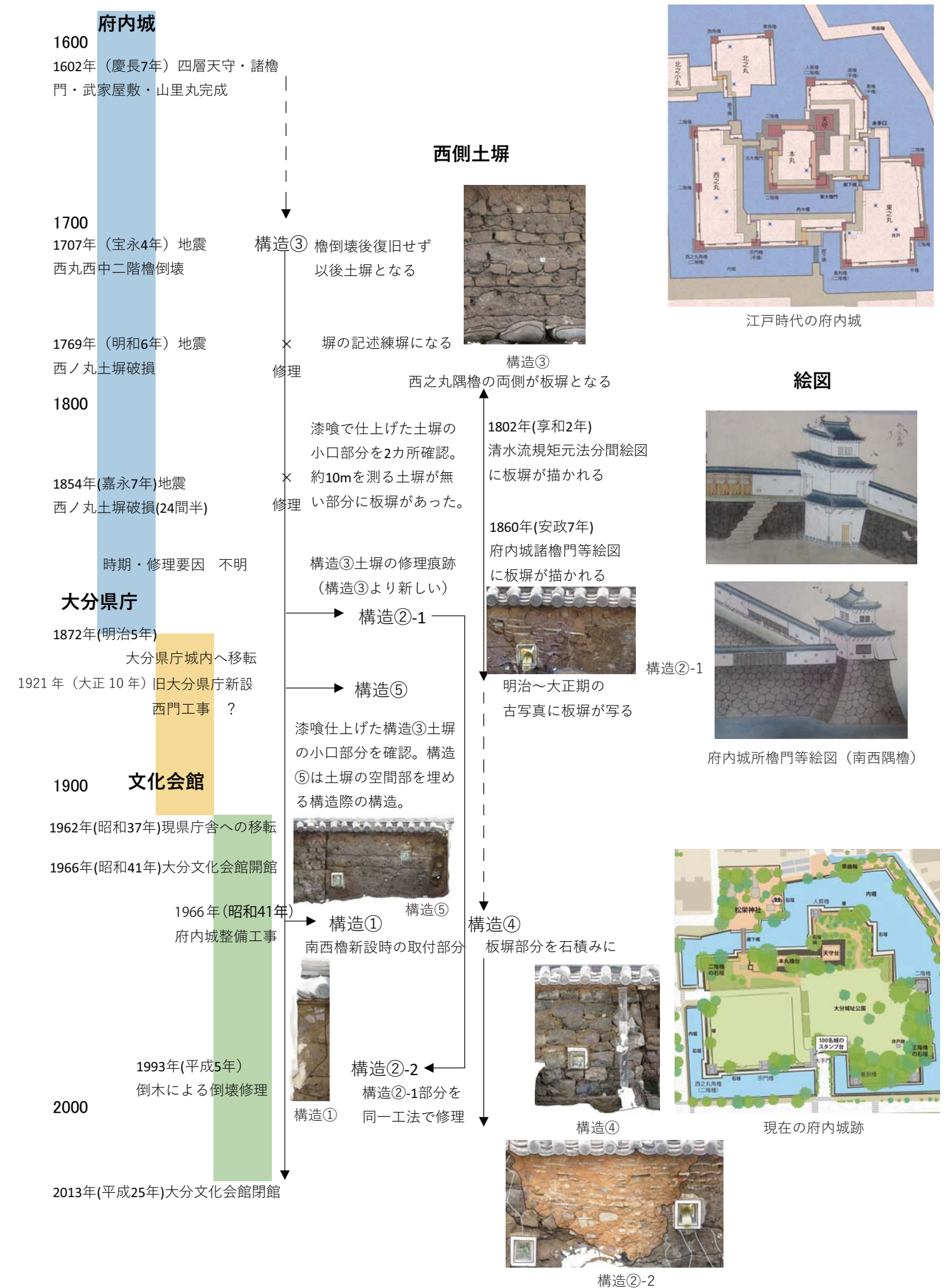


構造③の写真(東から)



土塀の構造模式図（府内城跡）

構造③は四角形の土塊を並べた層と土（模式図のアミかけ部分）の層を交互に積み重ねて造られています。この構造は、西側土塀の中ほどにあった西之丸二階櫓の推定場所にも見られ、このことから西之丸二階櫓解体後に西側土塀全体を構成する土塀として造られたと考えられます。その際に古い土塊を再利用したため、土塊の大きさが不揃いになったとみられています。今後、修理工事を進めていく中で、さらに詳細が明らかになっていくことが期待されます。





県指定史跡「府内城宗門櫓」保存修理事業

宗門櫓の基本情報 【県指定史跡】



▲江戸時代終わり頃の宗門櫓（左図：北より、右図：南より）【松栄神社所蔵絵図】

【沿革】 1963（昭和38）年2月15日に県指定史跡となる。
 【位置】 府内城二之丸の内、西之丸にある建物。
 【構造】 外からみると石垣の上に建つ平櫓で、城内からは2階櫓となる府内城建築の基本形である。櫓の3辺に石垣と塀が取り付け。特に北壁に接続する石垣と塀は、大手門がある出合曲輪と西之丸を仕切る出入口の一部で、敵の侵入を防ぐ重要な施設である。

【江戸時代の城郭建築が残る県内の城】

1. 府内城宗門櫓（大分市）2. 府内城人質櫓（大分市）3. 臼杵城卯土口櫓（臼杵市）4. 臼杵城畳櫓（臼杵市）5. 佐伯城三之丸櫓門（佐伯市）6. 日出城隅櫓（日出町）



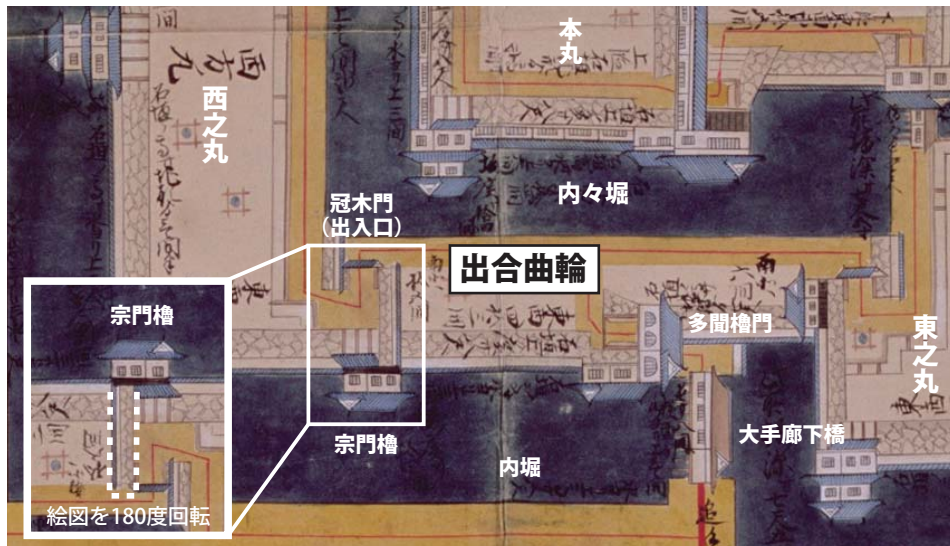
出合曲輪西側の石垣の発見

2016（平成28）年7月～11月
 宗門櫓の保存修理に伴い、遺跡の確認調査を実施。

【構造】 径1m程の自然石を2列に並べ、その間に人頭大の石（栗石）を詰めています。石列の幅は約3.5m、長さは約5mの範囲に造られています。絵図には幅1間4尺（約3.3m）、長さ9間2尺（約18m）とあり、**石垣の幅は、ほぼ絵図どおり、長さは北側にまで続いていたことが分かります。**

【用途】 調査で発見された石垣は、**下図の宗門櫓の2階につながる石垣そのもので、今からおよそ150年前、江戸時代の終わり頃に書かれた歴史書『豊府指南』にある出合曲輪と西之丸を仕切る石垣（出入口の一部）になります。**

●**出合曲輪**は、東之丸と西之丸の間にあり、大手廊下橋から多間櫓門（大手門）を入れて最初の曲輪で、敵の侵入を防ぐ重要な施設です。



▲豊後府内城之絵図（正保絵図）1644（正保元）年 国立公文書館デジタルアーカイブを使用



▲宗門櫓前で実施した発掘調査



▲発見された石垣の根石と栗石（北より）

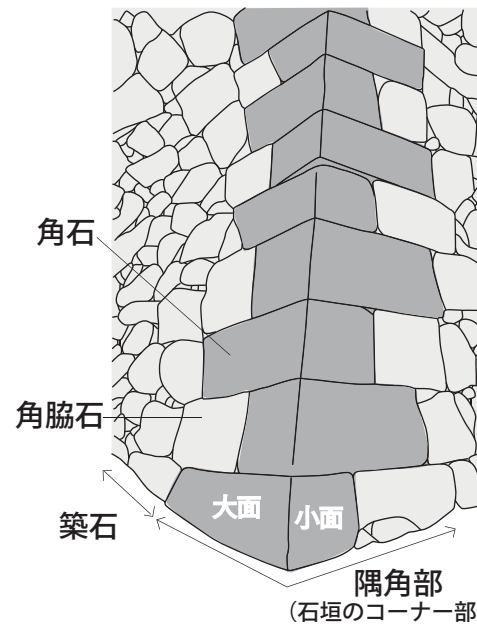


府内城の石垣

算木積みとは、隅角部を構成する角石の組み方で、直方体の角石の小面と大面を交互に組み合わせる方法です。この方法により、隅角部に対してかかる石垣の全重量を左右に分散して支える構造となります。

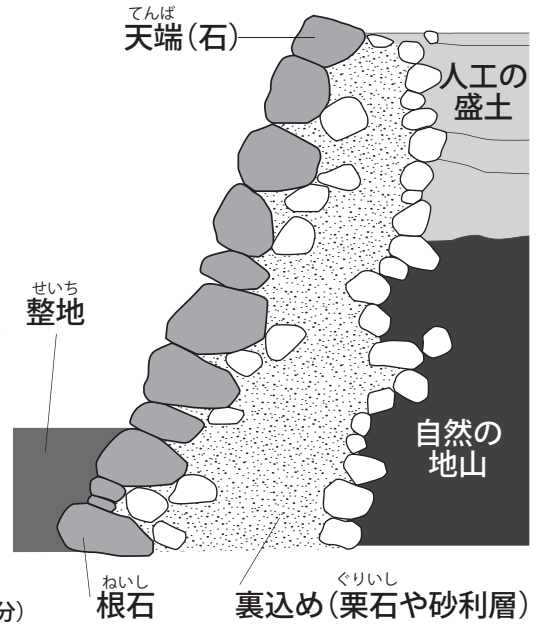
石積みは、一番下部に根石を置き、斜めに積んでいき、石垣の裏側には、約20cm大の石（栗石）を敷き詰めています。

【算木積み】



▲石垣の角の見取り図

【石積み】



文化庁文化財部記念物課 監修「石垣整備のてびき」を加工

▲石垣の内側の断面模式図



平成の大修理

【宗門櫓保存修理事業】

- 建築面積：41.05 m²
- 延べ床面積：52.51 m²
- 瓦の枚数：5500枚（内2700枚 再利用）
- 特徴
 - ・木造二階建て
 - ・瓦葺入母屋造り
 - ・出桁には方杖と呼ばれる支えを設置している。

第1期工事 2017～2018年度

概要：工事期間は、約15ヵ月間
 宗門櫓の建物の解体から組立、荒壁塗りまでを行い、半年の乾燥期間を設けた。

第2期工事 2019～2020年度

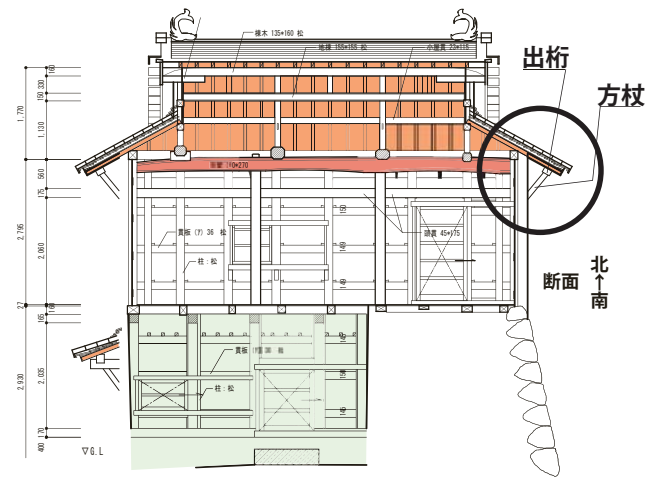
概要：工事期間は、約8ヵ月間
 中塗りから漆喰塗りを行い、宗門櫓の外壁の仕上げを行った。



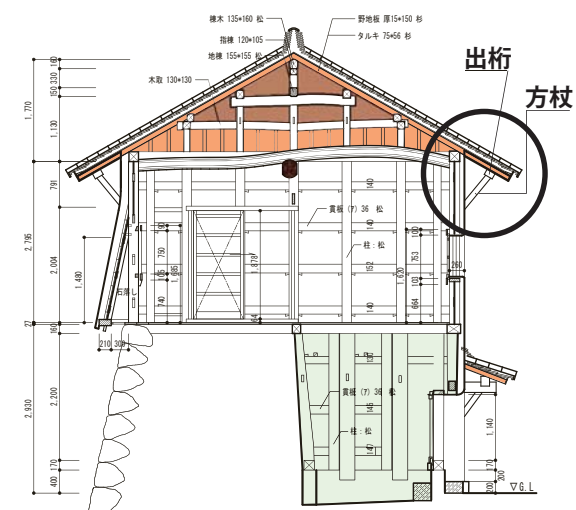
▲1期：柱や梁などの骨組み



▲2期：漆喰塗り



宗門櫓 桁行断面図



宗門櫓 梁間断面図 断面東⇒西